

「使徒の任命」

マルコの福音書 3:13~15

はじめに

今日の箇所は、イエシュアが「使徒」と呼ばれる十二人の弟子たちを任命される場面です。イエシュアは一つの山に登り、そこにご自分が選ばれた十二人の弟子たちを呼ばれます。そして彼らに悪霊を追い出す権威を与えられる、という出来事が記されています。イエシュアの行動、言動、またイエシュアについて記された聖書の記述にはすべて意味があります。そしてそこには必ずと言っていいほどに神のご計画の完成である「神の国、御国」についての情報が秘められています。今日も聖書の原語であるヘブル語から、またその一つひとつの言葉の最初の言及からそれを読み取らせていただき、神が第一に見ておられるもの、求めておられる事に目を留め、思いをめぐらし、待ち望む時となりますように。

1. 山に登る

【新改訳 2017】 マルコの福音書

3:13 さて、イエスが山に登り、ご自分が望む者たちを呼び寄せられると、彼らはみもとに來た。

この節には三つの出来事が組み合わされて記されています。すなわち

- ①イエシュアは山に登られた
- ②イエシュアはご自分が望む者たちを呼ばれた
- ③彼ら（弟子たち）はイエシュアのみもとに來た

の三つの出来事です。これらが記された理由、そこに秘められた意味について考えてみたいと思います。

まず「[イエスが山に登り](#)」という①のイエシュアが山に登られたことについて。ここに「上る、登る、ささげる」という意味の動詞アーラー(עָלָה)が使われています。この最初の言及は創世記 2:6 です。

【新改訳 2017】 創世記

2:4 これは、天と地が創造されたときの経緯である。神である【主】が、地と天を造られたときのこと。

2:5 地にはまだ、野の灌木もなく、野の草も生えていなかった。神である【主】が、地の上に雨を降らせていなかったからである。また、大地を耕す人もまだいなかった。

2:6 ただ、豊かな水が地から[湧き上がり](#)、[大地の全面を潤していた](#)。

このようにアーラーは本来「[水が地から湧き上がり](#)」という意味で使われ、そしてそれは「[大地の全面を潤](#)」すことを指し示していました。またイエシュアが登られた「[山](#)」と訳されたヘブル語のハル(הַר)という名詞が聖書で最初に使われている箇所もこれと同じような内容を指し示しています。

【新改訳 2017】創世記

7:19 水は地の上にありますみなぎり、天の下にある高い山々もすべておおわれた。

これはノアの洪水の一場面ですが、「山々もすべておおわれた。」とあるように、アーラーもそしてこのハルもともに本来「地のすべてを覆う」という出来事を指し示していると考えられます。ですから「イエスが山に登り」と記された出来事の中には、イエシュアが「地のすべてを覆う」こと、それはすなわちイエシュアの支配、統治が全世界に及ぶようになるという神のご計画が「型」として表された行為、出来事であると考えられます。イザヤ書 6:3 で御使いたちが「聖なる、聖なる、聖なる、万軍の【主】。その栄光は全地に満ちる。」と賛美したことが記されていますが、まさにイエシュアこそがこの【主】であり、やがて全地を治める御方となられることが、神のご計画の完成において筆頭に挙げられる最も重要な出来事であると言えます。

2. 望む者たち

次に「ご自分が望む者たちを呼び寄せられ」と記された、②イエシュアはご自分が望む者たちを呼ばれた、という出来事について。イエシュアが「望む者たち」とは一体どのような者のことでしょうか。ここに使われている「欲する、気に入る、喜ぶ」という意味の動詞ハーフェーツ(פָּקַד)、その最初の言及である創世記 34:19 から、その本来の意味を考えてみたいと思います。

【新改訳 2017】創世記

34:15 ただし、次の条件でなら同意しましょう。もし、あなたがたの男たちがみな、割礼を受けて、私たちと同じようになるなら、

34:16 私たちの娘たちをあなたがたに嫁がせ、あなたがたの娘たちを妻に迎えましょう。そうして私たちはともに住み、一つの民となりましょう。

34:17 しかし、もし、あなたがたが私たちの言うことを聞かず、割礼を受けないなら、私たちは娘を連れてここを去ります。」

34:18 彼らの言ったことは、ハモルと、ハモルの子シェケムの心になかった。

34:19 この若者は、ためらわずにそれを実行した。彼はヤコブの娘を愛していたからである。

これはヤコブ（すなわちイスラエル）の娘ディナを愛したヒビ人シェケムについての記述ですが、ディナの兄たち、すなわちイスラエルの息子たちはシェケムが割礼を受け、同族となることを要求します。シェケムはこれを快諾し「ためらわずにそれを実行した」とあります。ここに聖書で最初のハーフェーツが使われており、その理由は「彼はヤコブの娘を愛していたから」と記されていることから、ハーフェーツとは本来、ヤコブすなわちイスラエルの娘、その家、その家族を愛することを指し示した言葉であると考えられます。またここで「愛していた」と訳されているヘブル語はカーヴァド(קָוַד)と言い、本来は「重い、尊ばれる」という意味で使われている言葉であることから、イエシュアが「望む者たち」とは、イスラエルの家、イスラエルの民を重んじ、これを尊び、そしてこの民に加えられる者たちのことであると考えられます。創世記 12 章で神はアブラハムとその子孫すなわちイスラエルの民によって地上のすべての民族を祝福するというご計画を提示されました。人が神を信じ、その祝福を受ける

ためには、このイスラエルに繋がるほかにない、そのような時代、そのような世界が、イエシュアが全地を治める「神の国、御国」の内実であることが、ここに指し示されていると考えられます。

またイエシュアが「ご自分が望む者たちを呼び寄せられる」と記された「呼び寄せられる」という行為について。ここには「呼ぶ、告げる、読む」という意味のカーラー(קָרָא)という動詞が使われていますが、この言葉は本来、その最初の言及である創世記 1:5 の内容から、「分ける、区別する」という目的を持った言葉であると考えられます。

【新改訳 2017】創世記

1:4 神は光を良しと見られた。神は光と闇を分けられた。

1:5 神は光を昼と名づけ、闇を夜と名づけられた。夕があり、朝があった。第一日。

天地創造の初め、神は闇の中から光を呼び出されました。そこで「神は光を昼と名づけ」また「闇を夜と名づけ」と訳されている箇所が聖書で最初のカーラーです。これは前節の「神は光を良しと見られた」また「神は光と闇を分けられた」という内容が言い換えられたパラレリズム、並行法による強調表現であると考えられるため、カーラーには本来、神が選ばれるものと、そうでないものとを分ける、区別する、すなわち選び分けるという意味が指し示されていると考えられます。ですからイエシュアが「ご自分が望む者たちを呼び寄せられる」と記されたこの出来事には、神がアブラハムの子孫であるイスラエルの民を選ばれたように、この民に加えられる、繋がる者たちもまた神の主権による選びによることが表されていると考えられます。まさにこう言われている通りです。

【新改訳 2017】ヨハネの福音書

15:16 あなたがたがわたしを選んだのではなく、わたしがあなたがたを選び、あなたがたを任命しました。

神のご計画はすべて神の主権、その御心による選びが土台となっています。この選びによってご計画は始まり、一つも違うことなく着々と進められ、ついには完成へと至るのです。ですから神の選びは絶大かつ絶対です。その権威が神の御子であるイエシュアに与えられていることが、この「呼び寄せられる」と訳されたカーラーに表されていると考えられます。

3. みもとに来る

そして「彼らはみもとに来た」という出来事について。ここに使われている「来る、行く、もたらす」という意味のボー(בָּא)という動詞について考えます。この最初の言及は創世記 2:19 です。

【新改訳 2017】創世記

2:19 神である【主】は、その土地の土で、あらゆる野の獣とあらゆる空の鳥を形造って、人のところに連れて来られた。人がそれを何と呼ぶかをご覧になるためであった。人がそれを呼ぶと、何であれ、それがその生き物の名となった。

神は地上に生きるすべての生物を人の前に「連れて来られた」とあり、ここに聖書で最初のポーが使われています。そして神はそれらを「何と呼ぶか」という権限を人に委ねられました。ここには先ほど述べたカーラーが使われています。ですからこのポーという言葉には本来、地上を統治、支配する権限、また分ける、区別することすなわち裁くこと、その権威を与える、任せるという意味が指し示されていると考えられます。ですから御父である神が御子であるイエシュアにそのご計画のすべてを委ねられたように、神の国においてイエシュアは王の王、主の主として即位しつつも、その統治権をイスラエルとそれに繋がる者たちに任せられることがこの「イエスが山に登り、ご自分が望む者たちを呼び寄せられると、彼らはみもとに来た」という出来事の中に「型」として神のご計画の完成である神の国がどのようなものであるかという、その内実が表されていると考えられます。

4. 十二

【新改訳 2017】 マルコの福音書

3:14 イエスは十二人を任命し、彼らを使徒と呼ばれた。それは、彼らをご自分のそばに置くため、また彼らを遣わして宣教をさせ、

3:15 彼らに悪霊を追い出す権威を持たせるためであった。

イエシュアに選ばれ、みもとに来たのは人の数は「十二」でした。これをヘブル語でシェネーム・アーサール(רָשָׁעִים וְאַרְבָּעִים)と言います。シェネームが「二」、アーサールが「十」を意味します。ではまずシェネームについて、基本形はシェナイム(רַבְּנָיִם)と発音、表記します。この最初の言及は創世記 1:16 です。

【新改訳 2017】 創世記

1:16 神は二つの大きな光る物を造られた。大きいほうの光る物には昼を治めさせ、小さいほうの光る物には夜を治めさせた。また星も造られた。

1:17 神はそれらを天の大空に置き、地の上を照らさせ、

1:18 また昼と夜を治めさせ、光と闇を分けるようにされた。神はそれを良しと見られた。

1:19 夕があり、朝があった。第四日。

天地創造の第四日、出来事としては太陽と月と星が創造されたと考えられている箇所です。「神は二つの大きな光る物を造られた」とあり、ここに聖書で最初の「二」シェナイムが使われています。この「二つの大きな光る物」は昼または夜を「治めさせ」るために造られたことが分かります。ですからこのシェナイムの持つ本来の意味もまた、神から地上を統治、支配する権限を委ねられること、またはその存在を指し示すと考えられます。また「昼と夜を治めさせ、光と闇を分けるようにされた」ともあるように、権威を与えられた存在として選り分けられ、それ以外のものからまさに「二分」されたものであるということが、このシェナイムには指し示されていると考えられます。

次に「十」アーサールについて。これはアーサル(רָשָׁע)という動詞が語源であると考えられ、その意味は「十分の一を集める、十分の一をささげる」となっています。最初の言及は創世記 28:22 です。

【新改訳 2017】創世記

28:10 ヤコブはベエル・シェバを出て、ハランへと向かった。

28:11 彼はある場所にたどり着き、そこで一夜を明かすことにした。ちょうど日が沈んだからである。彼はその場所で石を取って枕にし、その場所で横になった。

28:12 すると彼は夢を見た。見よ、一つのはしごが地に立てられていた。その上の端は天に届き、見よ、神の使いたちが、そのはしごを上り下りしていた。

28:13 そして、見よ、【主】がその上に立って、こう言われた。「わたしは、あなたの父アブラハムの神、イサクの神、【主】である。わたしは、あなたが横たわっているこの地を、あなたとあなたの子孫に与える。

28:14 あなたの子孫は地のちりのように多くなり、あなたは、西へ、東へ、北へ、南へと広がり、地のすべての部族はあなたによって、またあなたの子孫によって祝福される。

28:15 見よ。わたしはあなたとともにいて、あなたがどこへ行っても、あなたを守り、あなたをこの地に連れ帰る。わたしは、あなたに約束したことを成し遂げるまで、決してあなたを捨てない。」

28:16 ヤコブは眠りから覚めて、言った。「まことに【主】はこの場所におられる。それなのに、私はそれを知らなかった。」

28:17 彼は恐れて言った。「この場所は、なんと恐れ多いところだろう。ここは神の家にほかならない。ここは天の門だ。」

28:18 翌朝早く、ヤコブは自分が枕にした石を取り、それを立てて石の柱とし、柱の頭に油を注いだ。

28:19 そしてその場所の名をベテルと呼んだ。その町の名は、もともとはルズであった。

28:20 ヤコブは誓願を立てた。「神が私とともにおられて、私が行くこの旅路を守り、食べるパンと着る衣を下さり、

28:21 無事に父の家に帰らせてくださるなら、【主】は私の神となり、

28:22 石の柱として立てたこの石は神の家となります。私は、すべてあなたが私に下さる物の十分の一を必ずあなたに献げます。」

これはヤコブすなわちイスラエルが見た夢と、そこに表された神の約束とご計画、そしてそれを受け入れたイスラエルが立てた誓いを記した箇所です。「私は、すべてあなたが私に下さる物の十分の一を必ずあなたに献げます。」というイスラエルが立てた誓いの中に、聖書で最初のアーサールがあります。そしてそれは上記の神がイスラエルに約束されたご計画が成就し、イスラエルが「父の家」すなわち「神の家」に帰ることを指し示しています。

このように「十二」シェネーム・アーサールという数には「神の家」すなわち「神の国、御国」の成就、完成に至る、イスラエルに対する神のご計画と、そのところにおけるイスラエルの民とそれに繋がる者たちに与えられる特権と権威が表されていると考えられます。

5. 任命する

またイエシュアは「十二人を任命し」とありますが、ここには「数える、任じる、決める」という意味の動詞マーナー(מָנָה)が使われています。最初の言及は創世記 13:16 です。

【新改訳 2017】創世記

13:14 ロトがアブラムから別れて行った後、【主】はアブラムに言われた。「さあ、目を上げて、あなたがいるその場所から北、南、東、西を見渡しなさい。

13:15 わたしは、あなたが見渡しているこの地をすべて、あなたに、そしてあなたの子孫に永久に与えるからだ。

13:16 わたしは、あなたの子孫を地のちりのように増やす。もし人が、地のちりを数えることができるなら、あなたの子孫も数えることができる。

これもまた神がアブラムとその子孫すなわちイスラエルに与えられた約束、ご計画です。イスラエルの民が「地のちり」のように増えることが約束されており、そこに「数える」と訳された聖書で最初のマーナーがあります。イスラエルの民が数えきれないほどの多くの民となることがこの「任命し」と訳されたマーナーの持つ本来の意味、そして「イエスは十二人を任命し」という出来事が指し示す神のご計画であると考えられます。

6. 使徒

そしてイエシュアは彼らを「使徒」と呼ばれ、また彼らを「遣わして宣教をさせ」とあります。使徒とは遣わされる者のことであり、どちらも「遣わす、(手を)差し伸べる」という意味の動詞シャーラハ(חָלַץ)がその語源です。そしてこの最初の言及は創世記 3:22 です。

【新改訳 2017】創世記

3:22 神である【主】はこう言われた。「見よ。人はわれわれのうちのひとりのようになり、善悪を知るようになった。今、人がその手を伸ばして、いのちの木からも取って食べ、永遠に生きることがないにしよう。」

これはエデンの園において罪を犯した人への神の対応措置を記したのですが「人がその手を伸ばして」という箇所には聖書で最初のシャーラハがあります。そしてこれは「いのちの木からも取って食べ、永遠に生きること」を指しています。つまりシャーラハとは本来、永遠に生きること、または永遠に生きる者のことを指し示した言葉であると考えられ、イスラエルの民とそれに繋がる者たちがそのような状態となることが表されていると考えられます。

7. 追い出す

またイエシュアは使徒たちに「悪霊を追い出す権威を持たせる」ことが記されています。イエシュアが人の中に住みついた悪霊たちに対してこの権威を行使した出来事が聖書にいくつか記されていますが、それはあくまでも「型」に過ぎません。それがここで「追い出す」という言葉へブル語で解釈すると見えてきます。ガーラシュ(גָּרַשׁ)という動詞がそれで、創世記 3:24 にその最初の言及があります。

【新改訳 2017】創世記

3:24 こうして神は人を追放し、いのちの木への道を守るために、ケルビムと、輪を描いて回る炎の剣をエデンの園の東に置かれた。

このように「エデンの園」からの「追放」、それがガーラシュ本来の持つ意味であると考えられます。「神の国、御国」の完成は、イスラエルがかつてのエデンの園のように回復すること（イザヤ 51:3）と同じ意味を持ちます。ですからイエシュアが使徒たちに「悪霊を追い出す権威を持たせる」とは、「神の国」から悪霊をガーラシュ「追い出す」権威をお与えになることであり、また「神の国、御国」の中にはサタン、悪魔、悪霊の類は一切入ることができないという事実が指し示された行為であるとも考えられます。

8. 福音

今日の内容をまとめると以下のようになります。

マルコ	語句	語源	最初の言及	神のご計画
3:13	イエスが山に登り	ハル「山」	創 7:19	イエシュアの支配、統治が全世界に及ぶようになる
		アーラー「登る」	創 2:6	
	ご自分が望む者たち	ハーフェーツ「望む」	創 34:19	イスラエルを重んじ、繋がる者たち
	呼び寄せられる	カーラー「呼ぶ」	創 1:5	神は選び分ける
3:14	十二人	シェナウム「二つ」	創 1:16	権威ある者として、他と二分された者
		アーサル「十分の一をささげる」	創 28:22	神の約束が成就し、イスラエルが神の家に帰る
	任命し	マーナー「数える」	創 13:16	イスラエルが数えきれないほどの民となる
	使徒、遣わす	シャーラハ「遣わす」	創 3:22	永遠に生きる
3:15	悪霊を追い出す	ガーラシュ「追放する」	創 3:24	神の国に悪魔は入れない

このように、神は神のご計画において、たしかにアブラハムの子孫であるイスラエルの民を特別にお選びになりました。そして「神の国、御国」においてこの民に権威、特権をお与えになろうとしています。しかしこの事実、ご計画を受け入れ、イスラエルに目を留め、私たちの神はイスラエルの神、イエシュアはユダヤ人の王なるメシアであることを認め、これに聞き従う者はみなイスラエルに繋がる者として、たとえ異邦人であってもイスラエルの同胞、同じ一つの民として認められることもまた事実であり、私たち異邦人にとってもやはりこれは良い知らせ、福音なのです。この福音を信じ、受け入れ、神の祝福つまりイスラエルと同じ祝福に与る者となることを求めましょう。御霊の助けがありますように。